

家庭訪問による不登校支援

1 きっかけ



登校しぶりが見られたら

学級の子どもが休み始めると担任も保護者も気持ちも動揺します。休み始めた子どもについて、その状況をしっかりと見極めることが必要です。

（１）不登校のA子との出会い

A子は、小学校5年生の夏休み明けから不登校状態でした。低学年の頃はおとなしく、4年生では週の始まりや長期の休み明けに登校しぶりが見られたということです。この学校では毎年クラス替えが行われ、私は小学校6年生の時に、担任として彼女にかかわるようになりました。その当時のA子は、学校関係者や友人と顔を合わせたがらず家にこもりがちの状態でした。

そのような状態のA子とA子を支える家庭を孤立させず、学校とのつながりを保つ方策として、定期的な家庭訪問による不登校支援を行っていかうと思いました。

2 実践のための準備

子どもの状況に応じた適切な支援を

不登校という事実は同じでも、その様態は様々です。状況の細やかな分析（見立て）をしてから、対応を考えます。

チーム支援

不登校の子どもの支援では、担任だけでなく管理職を中心とした多くの協力体制を作り上げることが大切です。

（１）校内の協力体制

A子の状態から、このケースは長期的な取組になりそうだと見立てました。家庭訪問の間隔が長く空いてしまったり、途中で途切れてしまったりせず、継続して定期的にかかわっていくためには、管理職を始めとする教職員の理解と協力はかせません。会議や打ち合わせで共通理解を図っていくとともに、同学年や生徒指導、教育相談の担当の先生には、こまめに状況を報告し相談しながら対応を考えていくようにしました。

細かな準備や手立てについては、時間の流れにそって「3とりくみ」の中で述べていきたいと思ひます。



3 とりくみ



不登校の子どもの家庭訪問の留意点

- 訪問日時をあらかじめ保護者に伝え、了解を得ることが大切です。また、車の駐車についての配慮も必要です。
- 訪問で、伝えることや聞きたいことなどを事前に整理しておくことは訪問面接を進める上で効果的です。
- 本人と会えなくても良いことを事前に伝えることで継続的な訪問が可能になります。
- まずは保護者との関係づくりが大切です。

訪問相談(面接)の長所とは

- 面接を通じて直接的に援助ができます。
- 家庭における生活状況を聴取し、把握ができます。
- 学校からの情報を直接的に伝達ができます。



(1) 初めての家庭訪問

6年生の担任になった私は、まず、家庭に電話をして「自分が6年生の担任になること」「できれば家庭訪問をさせてもらいたいこと」を伝え、日時の約束をしました。そして、近所の目を気にする方もいるので「車で伺うが、駐車する場所があるか」の確認もしました。電話で話をしたのは母親でしたが、その際に「本人には会えなくてもかまわないので、無理に顔を出させるようなことは決してしないでください。」と、念を押しておりました。

やはり、A子と会うことはできませんでしたが、母親が笑顔で迎えてくれました。長居はせず、早めに帰るつもりでしたが、居間に通してくれて、学校を休み始めた頃のことを話してくれたので、30分ほどの訪問になりました。初めての家庭訪問でしたので、このくらいの時間が限度かと思えます。

学年始めに新担任として家庭訪問をするのは、保護者と信頼関係を結ぶ第一歩として、有効な方策と思われる。新しい担任の先生が我が子のことを気にかけてくれたと、うれしく感じる保護者が多いのではないのでしょうか。中には、家庭訪問を迷惑に思う保護者もいるかもしれませんが、そのような雰囲気を感じたときには、短い時間で玄関先の挨拶程度で訪問を終わらせるなど、状況に応じた対応を考えると良いかと思えます。

お子さんにとっても、学年始めの家庭訪問は大きな意味をもつように感じます。学校関係者や友人にも会えない状態のA子の場合は、当てはまりませんが、家庭訪問を受け入れてくれる状態のお子さんや登校しぶりのお子さんには、「私が新しい担任だよ。これからは、何か気になることや困ったことがあったら、遠慮なく話をしてね。」と直接会って声をかけておくと、新しい学年での緊張や不安の軽減につながるように思います。「待ってるね。」くらいの声かけはしても、登校の約束などはしない方がいいように感じます。

(2) 定期的な家庭訪問

やはり、始業式から2～3日たってA子は登校することができませんでした。担任としては寂しさも感じましたが「焦るな。」と自分に言い聞かせながらのスタートとなりました。

A子とは会えなくても、不登校の状態が長くなって焦りや疲

訪問相談担当教員とは

子どもの不登校が長期的に改善が見られなかったり、保護者や子どもと会えなかったりなど、状況が難しい場合には、専門機関や訪問相談担当教員と連携して解決の糸口を探すことも一つの方法です。

※P72コラム10【訪問相談担当教員】参照



れが見られる母親を支えていくことと、家庭と学校のつながりを切らないようにする必要があると思われたので、定期的に家庭訪問をしていこうと支援の方針を立てました。

ここで、私が定期的な家庭訪問をするときに気を付けていることを、あげてみたいと思います。

① どのくらいの間隔で訪問するか

かかわりが長くなりそうなときには、家庭の負担にならないように配慮することも大切ですが、訪問する側も無理をしないことが大切だと思います。最初は頻繁に家庭訪問をしていたのに、忙しくなり訪問の間隔が長くなってしまうと、担任にはそういうつもりはなくても、子どもや保護者の中には見捨てられてしまったような気持ち「見捨てられ感」を持ってしてしまうことがあります。そのようなことを防ぐためにも、一週間に一度とか二週間に一度というように、無理をしすぎずに続けていけるようなペースで訪問していくのが良いのではないのでしょうか。また、かかわりが長くなりそうなケースは、思い立ったときや必要のあるときに不定期な家庭訪問をするより、間隔や時間等、ある程度枠組みを決めた方が安定した関係が作れるように思います。A子のケースは、一週間に一回ぐらいならば、私も無理がなく家庭訪問ができそうだと考えました。

② どこで子どもや保護者と会うか

家庭訪問は、相手のプライベートな領域に入らせてもらうことになります。ですから、基本的には相手の希望に合わせていきます。玄関先、居間、客間、どこに案内してくれるかで、相手との距離や信頼を推し量ることもできそうに感じます。訪問を重ね関係ができてくると、玄関先でしか話ができなかった家庭の保護者が「どうぞ、あがってください。」と声をかけてくれるようになることもあります。ずっと玄関先での話で、全く部屋には入れてくれないような家庭もあります。しかし、それはそれとして無理はしません。関係性とは別に家庭の都合がある場合もあるからです。

また、母親の中には、同居している祖父母やお子さんがそばにいて、話が思うようにできない、という人もいました。そのような時は、家庭訪問は続けながらも、時々母親に学校に来てもらい、じっくり話を聞く時間をとることもありました。

③ 子ども部屋は要注意

子どもと遊んだり学習したりできるような状態になったとき、どこで会うかは子どもの気持ちを第一にします。「どこ



がいい？」と尋ねられても答えられない子どももいます。そのようなときは選択肢をいくつか示し、その中から選んでもらいます。保護者が、子どもの部屋に入るようにすすめてくれることもあるのですが、これは慎重にします。親がどうぞと言ってくれても、子ども自身の気持ちが確認できないときや、子どもが戸惑うような様子を見せたり、嫌がったりした時は入りません。子どもにとって自分の部屋は、自分を守る最後の砦のような意味があるようです。ですから子どもの部屋に入るときは必ず本人の了解を取ってからにするようにしています。

④ 反応を確かめるのは、前後の様子

不登校の子どもたちの中には、大人にとっても気を遣うタイプのお子さんがいます。すると、家庭訪問で会っているときには無理して楽しそうにしていることもあります。ですから、お子さんの反応を確かめるには、訪問の前や帰ってからイライラしたり落ち込んだりした様子がないかを、家の人にさりげなく見てもらいます。そして、その様子を次の日に電話で家の人に尋ねて、自分のかかわりが適切か、対応の仕方が強すぎていないかを確認します。

(3) 担任としての焦り

担任としての焦り

子どもとの関係がうまく築けないとき、子どもが困っているとき、担任の立場として自分が何とかしなければという気持ちが強くなります。これは、とても大切な想いです。しかし、時には「それを自分がすることが子どもにとって一番望ましいことだろうか。他の選択肢はないだろうか。」と、立ち止まって考えてみることも大切です。迷ったときには、相談できる管理職や同僚がいることも心強いです。

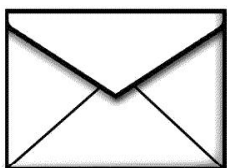
1学期も終わりに近づき、母親支援を目的とした家庭訪問は軌道に乗ってきました。手紙を届けたりA子の様子を聞いたりしながら、居間で15分ほど話をするのがほとんどでした。時には母親の長い話で30分以上になることもありましたが、不安になる母親を支えるためには必要であったと思われれます。

しかし、A子とは会えないままでした。ですが、学校に連れて行こうとしたり、無理に会おうとしたりしないことがわかってくると、私が母親と会うことに対する拒否感はなくなってきたようです。私が訪問する日も、普段と変わりなく落ち着いて過ごせるということでした。

そこで、私からの手紙を渡してみることにしました。可愛い便せんを選び、学校とは関係のない話題でごくごく短い文章を書き、母親からA子に渡してもらいました。読まなければ読まなくてもいいので、返事を書くように催促などはしないで欲しいことをお願いしました。私がA子に気持ちを向けていることが伝わればいいと考えたからです。A子から返事は来ませんでした。読んではくれているということでした。

リレーション作りの工夫

不登校の子どもにかかわる時には、家庭での子どもの様子を保護者から情報収集をしながら適切な対応が必要です。日常生活が安定しているような状態ならば、手紙などで関係づくりの支援をすることも大切です。



(4) 2学期の様子

A子は10月の修学旅行も参加できませんでした。けれどもクラスの仲間からのお土産を受け取ってくれました。そして、私が手紙に学校のことを書いたり、母親が学年便りを見たりしながら、学校行事等のことを話題にしても、「ふーん」「そうなの」といった感じで普通に話を聞けるようになっていました。以前のように泣き出すとか、部屋に入ってしまうことはなくなりました。さらに、その頃には、家族で遊びに出かけたり、母親と一緒に近所のコンビニに買い物に行ったりすることができるようになっていました。

変化があったのは、11月に入ってからです。私がいつもの居間に通してもらおうと、A子と鉢合わせをしてしまいました。お互いに驚いたのですが、私が「こんにちは。」と声をかけると、聞こえるか聞こえないかの細かい声で「こんにちは。」と挨拶を返してくれました。そして、急いで自分の部屋に入っていました。A子の様子が気になり、次の日、私が帰った後の様子を母親に確認すると、いつもと変わらず過ごしていたということです。初めてA子の姿を見て声を聞くことができた私は、うれしくてたまりませんでした。

うれしすぎて、冷静さを欠いていたのでしょう。私はその次の家庭訪問で、A子の部屋のドアをノックして声をかけてしまいました。A子の反応はありません。そのかわりに、ドアの向こうで何かを投げつけるような音がしました。その音を聞いて、私は我に返りました。その日の手紙をA子は読んでくれませんでした。

一週間後の訪問はとても怖くて、できれば行きたくない気持ちで一杯でした。手紙も何を書いたらいいのか、また、渡してもいいものだろうかと悩みましたが、素直な私の気持ちを書くことにしました。A子が挨拶を返してくれてとてもうれしかったこと。うれしかったのでもっと近づきたいと思ってしまい、部屋をノックして声をかけてしまったけれど、それはA子の気持ちを考えてなかったことで、謝りたいと思っていることなどを書きました。その日の訪問は、早めに切り上げ、次の日に電話で母親からA子の様子を聞きました。手紙は母親の前では読まなかったが、そっと一人で読んだような気配があること、生活ぶりは普段と変わらず落ち着いているということを知り、少しほっとしました。

A子が以前のように私の手紙を読んでもくれるようになるには、3週間ほどかかりました。3週間で元に戻れたのは、A子自身が元気をすいぶん取り戻していたからでしょう。その3週間の

間，私の不安と落ち込みは相当なものでした。また，定期的な家庭訪問も，何か理由をつけて行かないですむようにしたいと思ってしまうほどでした。

そのような状態の私を支えてくれたのは，同僚の先生方でした。A子の家庭と直接かかわっているのは担任である私なのですが，その私を多くの先生が支えてくれていることを強く実感しました。また，中学校区のスクールカウンセラーに，話を聞いてもらったことも大きな支えになりました。これからの対応について具体的なアドバイスをいくつかもらったのですが，なによりも心に残っているのは「今，感じている怖さや自己否定の気持ち，家庭訪問に行かなければならないのだけれど行くことができない感じ，それは，不登校の子どもが学校に行きたいけれど行けない感じに近いのではないですか。」「その気持ちとしっかり向き合うことは，不登校の子どもさんを理解することにきっと役立ちますよ。」という言葉でした。自分の失敗に意味を見出すことができたのです。

（５）大きな変化

12月に入って大きな変化がありました。A子が散歩などの世話を自分がする約束で，犬を飼うことになったのです。A子は，とても犬をかわいがり，犬もA子になついていきました。母親によるとA子の表情が生き生きとしてきて，沈みがちだった家の中の雰囲気も明るくなってきたということでした。

そのような様子が語られるようになってきたある日，私はとうとうA子と会うことができました。母親から私が「犬に会いたい，犬に触りたい。」と言っていたと，さりげなくA子に伝えてもらったのです。すると「今度先生が来たら，見せてあげるよ。」という返事があり，その後の訪問では母親と犬と一緒に私を出迎えてくれたのです。

それからの家庭訪問では，犬と一緒にA子と会うことができるようになりました。犬が，A子と私の間の緊張感をほぐしてくれているようでした。始めは10分ほどの短い時間でしたが，少しずつ時間を延ばしていき，おしゃべりをしたり，ゲームをしたり，手芸をしたりして，30分ほどの時間を一緒に過ごすことができるようになっていきました。

私が犬に会いたいということ，伝えてもらうかどうかについては，大変悩みました。A子の表情が明るくなり，外に出ることもできるようになっている状況から，今がチャンスかもしれないと考えていることを，スクールカウンセラーや関係する先生方と相談をして判断をしました。





上手な登校刺激の与え方の 3つのポイント

- ① 小さな話題から出す。
- ② ダメなときはすぐ引っ込める。
- ③ 結果については、後日、家庭に連絡する。

子どもを傷つけたり、追い詰めたりしないために、この3つのポイントを押さえます。

子どもの状態が安定してきたら、子どもが動き出すのを待つだけでなく、少しずつ登校刺激を与えながら、回復を図ることが大切になります。

(6) 放課後登校

3学期になり、安定してA子に会えるようになってきたので、家庭訪問の目的は、母親支援から本人支援へ変わっていきました。二人の時間を一緒に楽しく過ごすことを心がけ、A子と会っていくと、時折自分の気持ちを語ってくれることができました。休み始めた頃のこと「運動会の団体競技で、運動が苦手な自分がみんなの足を引っ張っているような気がして辛かった。」「でも、運動会の後も学校に行けなかったのは、どうしてなのか自分でもよくわからない。」と話をしてくれました。そこで、過去の辛かった気持ちを受け止めながらも、これからどうしていきたいのかをA子が考えていけるような言葉かけを意識していきました。具体的には、A子の様子に気を配りながら、学校やクラスで行われるA子も参加できそうな行事をさりげなく話題にしていきました。

縄跳び集会や芸術鑑賞会のことを話すと、縄跳び集会には拒否感を示しましたが、芸術鑑賞会には興味を示してきました。そこで、他の児童が入場して暗くなってから体育館に入るとか目立たない後ろに座るとか、細かな計画を立て、不安感を減らしていった結果、参加することができました。芸術鑑賞会に参加できたことは、A子と学校の距離を縮めることに役立ったようです。

2月に入り、A子から学校のことを口にするが増えてきたので、思い切って放課後登校を提案してみました。すぐに答えを求めず「考えてみてね。」と考える余裕を持たせたところ、次の家庭訪問の時には「やってみる。」との答えをもらうことができました。生真面目なA子は「毎日行きたい。」と言うのですが、無理をさせないように「週1回から始めて、慣れてきたらだんだん回数を増やしていこうよ。運動だって準備運動からでしょ。」と納得させました。時間や場所についてA子や保護者と相談しながら、学校の体制も整ったところで、母親と一緒に保健室への放課後登校が始まりました。

始めは、週1回15分ほど、担任や養護教諭とおしゃべりをして帰るということをしていましたが、3月になって週3回（月、水、金）に回数を増やしました。時間も少し延ばし卒業文集の作文を書いたり、先生方へのお礼の手紙を書いたりする作業にも取り組むことができるようになってきました。

(7) 卒業に向けて

担任としては、教室復帰をしクラスの人々と一緒に卒業式に参加して欲しい気持ちがありました。しかし、2月にやっと

再登校が始まったら

再登校を順調にするためには、どのようなきっかけや希望をもって登校したいと考えるようになったかを知ることが大切です。子どもたちはあまり言語化して語ることは少ないのですが、それまでの経過からおおよその推測をしておくことが有効です。

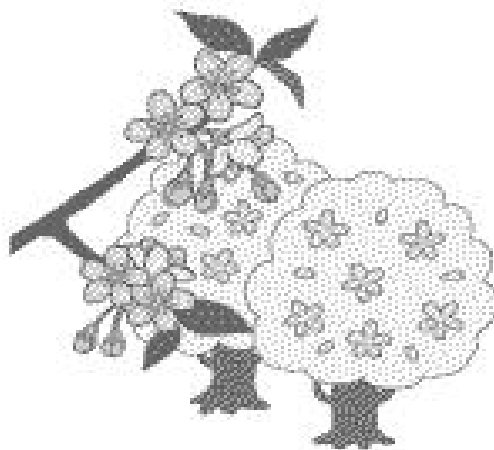
中1ギャップ

小学生から中学1年生になったとたん、学習や生活の変化になじめずに不登校となったり、いじめが急増するという現象。新潟県教育委員会が名づけました。

放課後登校ができるようになったA子に、それを求めるのは難しいことも分っていました。そこで、小学校卒業、中学校進学に際して、どのような支援をしていくか、スクールカウンセラーや関係する先生方と話し合いを持ちました。友達や先生と会うこともできず、家に籠もりがちだったA子が放課後登校できるようになったことは、大きな成長であること。学校の時間の流れにとらわれず、A子の人生という大きな流れの中でA子の支援を考えよう、ということで、A子の中学進学にかかわる不安をできるだけ軽減することと、中学校での居場所が作れるよう引き継ぎをきちんと丁寧に行うことが、卒業を前にした支援の方針として確認されました。卒業式は、A子と保護者と何度か話し合いを行い、卒業証書授与のところだけ式に参加するという形を取りました。

中学生になったA子は、校内の適応指導教室*1に通いながら、部分的に授業に参加できるようになってきたということです。

小学校で教室復帰ができないと、中学校でどうなってしまうのかと不安になる保護者や先生方も多いようです。しかし、本人の回復状況を見せず、焦って小学校のうちに何とかしようと強すぎる登校刺激を与えてしまうと、逆効果になってしまいうことがあります。適切な支援がされていれば、その結果が小学校のうちに現れなくても、中学校へとつながり実を結んでいくものです。実際に、小学校では不登校状態は解消されませんが、中学校へと適切な支援がつながっていき、支援教室への通級、教室復帰へと回復していき、高校進学を果たしたケースをいくつか知っています。但し、その子の特性や回復状況に合った適切な支援が行われていたケースということで、「小学校の不登校は心配ない」「中学校でなんとかなる」ということではないことを、あらためて強調しておきたいと思います。



*1 適応指導教室 不登校児童生徒の自立と学校復帰を促すために、学校の中(校内適応指導教室) やそれとは別に市町村の公的な施設(適応指導教室) に設置したもの。

4 見えてきたこと



(1) 担任を支える校内連携

学校関係者に会えない子どもや保護者でも、根気よく丁寧にかかわっていくことで、心を開いてくれることがわかりました。しかし、その変化はとてもゆっくりで小さいものです。直接かかわっている担任は、自分のしていることの意味が見えなくなったり焦ったりします。私の場合は、管理職や、同学年の先生方を始めとする同僚の先生方に支えられたと思います。会議で事例検討したり、対応を話し合ったりすることも大切ですが、同僚との何気ないおしゃべりや声かけにも大変励まされたように感じます。スクールカウンセラーからの専門的なアドバイスもケースを理解するのに役立ちました。家庭訪問の活動自体は一人ですが、校内で連携をとりチーム対応をすることが重要だと思いました。

(2) 家庭訪問を受け入れてもらえない場合

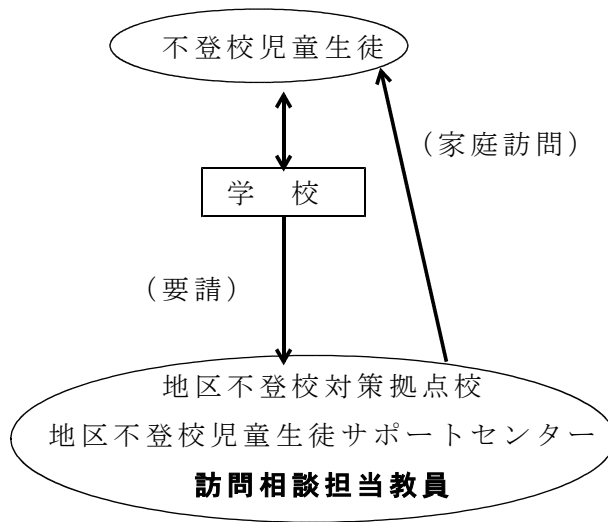
A子のケースは、家庭もしっかりしており、本人が元気を取り戻すにつれ解決への道筋が見えてきました。

しかし、中には、保護者の養育能力が十分でなく、不登校が長期化しているのにもかかわらず、家庭訪問や電話を拒否するような場合もあります。そのような場合は、虐待の可能性も考えての対応が必要になってきます。不登校対応というより、子どもの生存確認が家庭訪問の目的になってくることさえあります。気になる様子があった場合には、児童相談所や市町村の児童家庭課等との連携が必要になります。また、経済的な状況が厳しい場合には、生活保護などの社会福祉の支援へとつないでいくことが必要な場合もあります。発達障害の二次障害として不登校の状態になっていることが考えられる時には、特別支援教育や医療との連携が必要になってきます。

不登校問題の支援は、不安や焦りに揺れ動く本人や保護者を支えていく情緒的なサポートが大切です。それとともに、特別支援教育や福祉・医療などと連携をして、子どもを取り巻く環境を整えていく現実的なサポートが必要なこともあります。不登校には、学校、本人、家庭の問題などいくつかの要因が重なっていることがあるからです。学校だけで対応しようとするのではなく、関係機関との連携を支援の視点として持つておくことも大切であると思います。



コラム10【訪問相談担当教員】



〈地 区〉

葛南西部地区 葛南東部地区

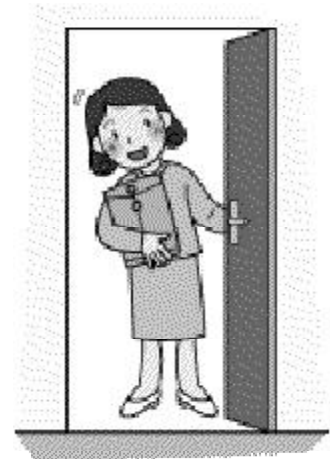
東葛飾地区

香取・海匝地区 印旛地区

長生地区 山武地区 夷隅地区

市原地区 君津地区 安房地区

訪問相談担当教員とは、各地区の不登校対策拠点校で、家庭訪問を中心に不登校対策の仕事を行っている教員です。訪問相談担当教員を要請するには、まず各地区の不登校対策拠点校にいる訪問相談担当教員に連絡を取ってください。正式には、要請校の校長から拠点校の校長へ文書での要請が必要になります。



コラム11【不登校のとりえ方】

不登校の子どもの対応を考えるうえで、個々の状況が異なるということを前提としつつも、共通なものをもったいくつかのグループに分け「タイプ」とすることで、見立てや対応の手がかりが得やすくなります。これら3つのタイプ〔図1 不登校のとりえ方（2000，小澤）〕が事例を見立てる時の基本的な視点となります。

(1) 心理的な対応の必要なタイプ

子ども自身が敏感すぎる心や強い不安をもっていて、しだいに集団の生活になじめなくなる場合と、思春期の特性である自我の確立に鋭く立ち向かっていて、自己への不安や体制や権威に対する反発から急に葛藤状態になる場合です。

(2) 教育的な対応の必要なタイプ

学校生活における問題、特に学習と対人関係でのつまずきや挫折にあった場合です。

(3) 福祉的な対応の必要なタイプ

家庭生活の負担が大きかったり、家庭生活そのものが成り立たないために不登校になる場合です。

そして、もうひとつの視点が、不登校がどのように始まり進行したのかと言う情報です。ある時期から急激に変化した状況は急性型、小学校入学の頃から年単位で進んできた状況は慢性型です。不登校のタイプを見立てることで、適切な対応がなされることが重要です。

小澤美代子著「上手な登校刺激の与え方」から



図1 不登校のとりえ方（2000，小澤）



コラム12【不登校の回復過程】

どのようなタイプの不登校でも、ほとんどの場合、いったん不登校状態になると、回復までにはほぼ同じような過程をたどります。その過程の全体像を下記に示します。その過程は、時間の経過に従って、前兆期、初期、中期、後期、社会復帰の五つの段階に大きく分けられます。それぞれの段階の特徴を把握することで対応の方向性が見えてきます。かかわりが適切であるためには子どもの状態の的確な見立てが不可欠です。

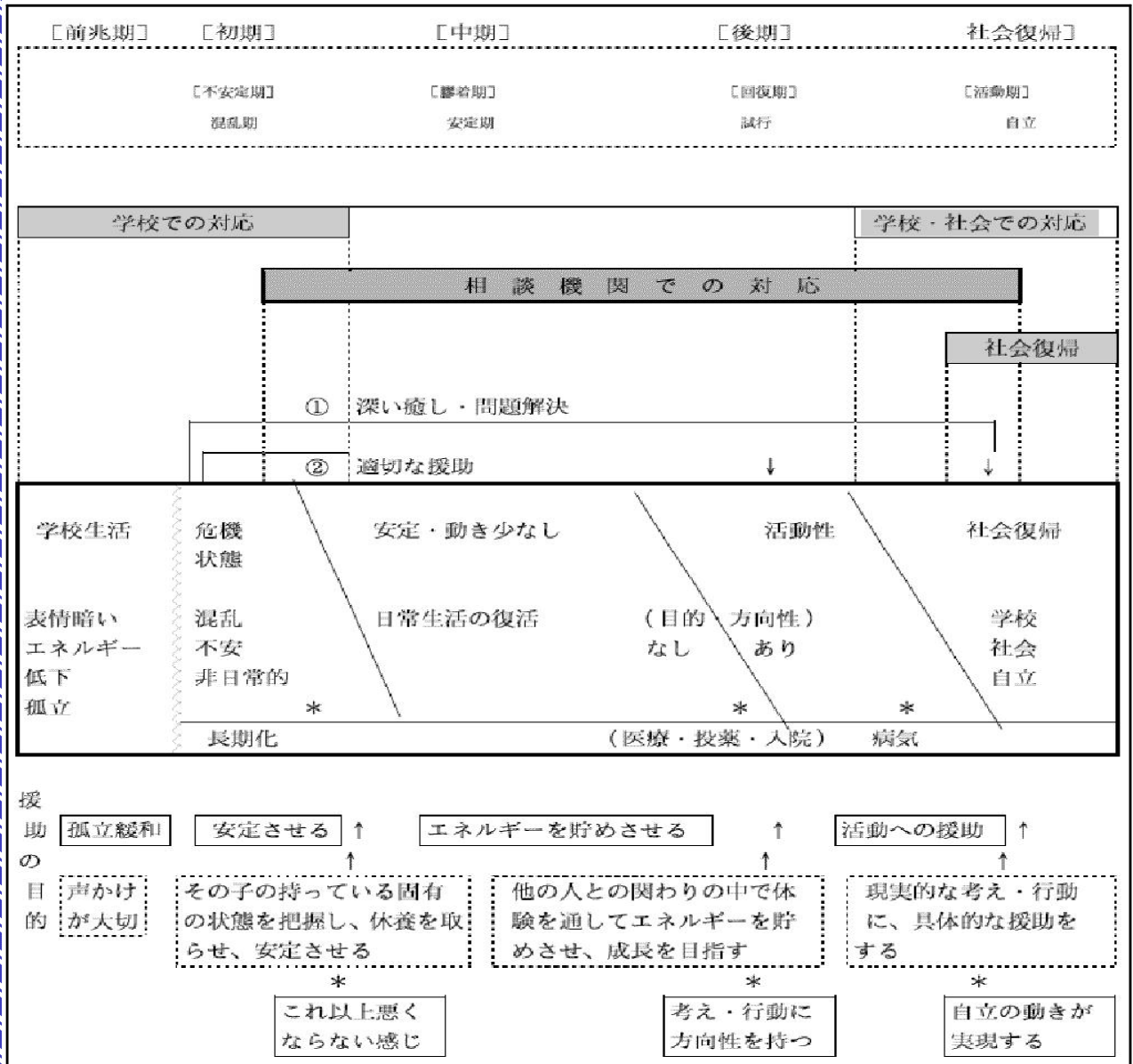


図 2 不登校の回復段階 (2004, 小澤)

《参考となる文献》

長坂正文 (2009 ~ 2010). 月刊学校教育相談 不登校 家庭訪問のチェックポイント第1回~第11回 ほんの森出版

小澤美代子 (2003). 上手な登校刺激の与え方 ほんの森出版

小澤美代子編 (2006). 〈タイプ別・段階別〉続上手な登校刺激の与え方 ほんの森出版